

川柳

青木 十九郎
重森 恒雄 選
峯 裕見子

特選 本籍は地球ですわと言う日来る

大藪町 大塚 しのぶ

(評) 無限大とも思える広大な宇宙の中の地球以外のどこかに、知的生命体が存在していて、そして、いつの日か、このような情景が見られるかもしれない。遠い星空を眺めながら、宇宙の神秘について考えるのは楽しい。(十九郎)

特選 使つてないのよよかったですねと置き薬

愛知郡愛荘町 青木 郁子

(評) 玄関の上がり框や縁先での、主婦と製薬会社の「営業さん」との会話であろう。家族構成や持病も承知してくれていて、世間話なども出るのかもしれない。会話形式が自然で無理がなく、ゆつたりとした情景が浮かんでくる。(裕見子)

特選 はなの散る窓辺カボチャを甘く煮る

松原町 川村 美栄子

(評) 花の散る窓辺で思うことは空しさや寂しさだろう。美しく舞う花に昔を思いこれからを思う。せて甘く煮るしかない不格好なカボチャ。(恒雄)

入選 生きようよ枝葉茂らせ風を受け

竹ヶ鼻町 小椋 きぬ子

(評) この世に生を受けたからには、生涯を幸せに暮らしたいのは誰しも願うことである。したがって、小さなことでもいいから自分に合ったものを伸ばして、困難を乗り越えて行こう、という作者の心意気がある。(十九郎)

入選 庭いっぱい話し相手を植えている

正法寺町 高井 豊

(評) 季節の植物の世話をする楽しい時間。それぞれの草や花の一つ一つに声をかける。多弁な花や無口な花、少し気難しい「子」もいたりして、みんな一様ではないのだろう。シンプルだが、作者の笑顔が見えるような句である。(裕見子)

入選 断食で見えた砂丘を行く景色

日夏町 浅井 利行

(評) どうもこの断食は痩せたいという邪念によるもので宗教的な崇高なものではなさそう。それでも、三蔵法師の見た景色を共有できたのだろう。何かを悟られたのかもしれない。(恒雄)

入選 去りがたく花のもとにて小半時

大津市 的場 功巳

(評) 通いなれた道、あるいは、たまたま訪れた所で見付けた花に、なぜか心を惹かれる。可憐な、または、清楚な、あるいは、華やかな花のいずれかは分からないが、作者の生き様に強烈に響いたのである。小半時は今の三十分ぐらい。(十九郎)

入選 寝る前に今日のいいこと三つ書く

須越町 島田 洋子

佳作 につこりとしている花へ蝶は来る

東近江市 河崎 章

(評)

良くないことを数えても一日は一日。ならば「いいこと」を数えようという信条で生きている。単なる樂觀主義というよりも、苦勞の果てに身に付いたプラス思考のように思われる。五・七・五のリズムに想いが快く乗っている。

(裕見子)

入選 指揮棒のはるか先行くしやばん玉

外 町 筑田 豊子

佳作 咳をして風呂の鏡を拭いている

稲里町 霸流 不良者

佳作 夕焼けて明日を夢見るちよようになる

犬上郡豊郷町 須田 さゆり

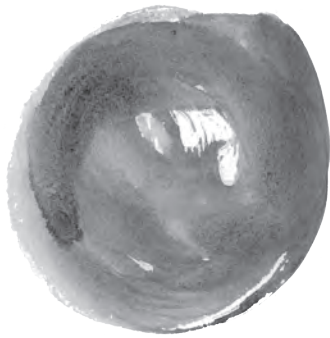
佳作 電子辞書ひろげて春が満水す

米原市 西尾 辰之

(評)

シャボン玉はゆらゆらと風に揺れて随分高く、もう私の意見など届かないところへ行ってしまった。せめて割れるなど願うばかり。子を見る親心。

(恒雄)



佳作 たとえ話つづく炊きあがる小豆

犬上郡甲良町 川口 利江

佳作 無礼かずかず畑に埋めて耕して

大津市 大橋 啓子

佳作 重い髪切って心の乱おわる

鳥居本町 寺村 美恵

佳作 土間の隅ぽつんと母の火消壺

地藏町 大谷 のり子

佳作 ひこにやんにおきばりやすと声かける

堀 町 川 分 洋 子

佳作 遠回り日陰歩きしことも糧

長浜市 野口 成人

佳作 山菜を茹でる厨に春の風

鳥居本町 谷口 繁子

佳作 話したい面と向かって話したい

大藪町 清水 慶昭

佳作 年かしたら涙も少し重くなり

肥田町 藤野 佐津子

佳作 思い出に浸るわたしの爪の先

近江八幡市 浅野 忍

佳作 自粛して誕生ケーキ祖母の手で

宇尾町 門野 操

佳作 お互いに六十点で丁度いい

八坂町 山本 はるか

佳作 気に入りのブラウスうれし初夏を待つ

西沼波町 外海 芳子

佳作 無口でも慣れ親しんだ風が吹く

古沢町 野洲 令子

佳作 生きてゆく自分の癖にみがきかけ

本庄町 田口 洋子

佳作 新コロナ命を懸けて買い物に

岡 町 宮地 正子

佳作 夢語る孫青春の真つただ中

稲里町 藤野 千枝子

佳作 ありがたい今日も二人で朝ご飯

東沼波町 野口 博子

《総評》

応募者の分布

今年度の川柳部門の応募者は五十九名(昨年より三名増)でした。文化振興室の調べによる応募者の年齢別および地域別分布は、次のようになります。

【年齢別(無記入六人を除く)】

五十九歳以下 無し 六十～六十九歳 五人
七十～七十九歳 二十九人 八十～八十九歳 十八人
九十歳以上 一人

【地域別】

彦根市 四十三人 東近江市 四人
犬上郡・長浜市 各三人 近江八幡市・大津市 各二人
愛知郡・米原市 各一人

年齢別では、七十歳以上が四十八人で全体の八十一%を占めます。六十九歳以上が五名という少なさには危惧を抱いています。

川柳創作について

自分の作品だけしか読まないという方がいたら、考え直してください。他人の良い作品を読んで、着眼点、着想、作風、表現、言葉や文字の使い方などを確かめてください。そうすることで、これから創るあなたの作品に、自分の思いがより深く反映されるようになると思います。

青木 十九郎

今年もまた楽しく選をできたことが嬉しく投句していただいた皆様に心より御礼申し上げます。

今回は新型コロナウイルス感染症の流行で、三人の選者が合議する機会は設けられず、表彰式もその後の部門別の集まりもなく、各選者さん

の声も作者の皆様ともお会いすることもなく終わってしまいました。やはり、句は作りっぱなし、選びっぱなしでは味気ないものだなと再認識しました。

入選したか落選だったかにこだわることはないのですが、自分の思いや考えを十七音にうまく載せることができたかどうかにはこだわりたいと思います。

選者は何気ない表現の中の作者の哀しみを選んだかどうかにこだわっています。作者がいて選者がいて、句が発表されて世の中に出て行きます。彦根市民文芸からいい句を出していきましょう。

重森 恒雄

今年のこんな状況の中で、応募して下さる方が減るのでは、という心配も杞憂に終わりました。充分な募集活動ができなかったにも関わらず、昨年よりも多い五十九名の方が作品を寄せてくださいました。当然のように、新型コロナウイルスを詠んだ句もありました。

短詩形の歴史から見ても、川柳は時事を詠むことが多く、動き続ける時勢の中で生きる人間の喜怒哀楽を端的に表現します。難儀な状況の中で、時代や自身を見つめる目を持っている人が多くある、ということも、改めて感じました。

自分を詠む現代川柳にとって、人生というのは川柳の素材の宝庫と言えるかもしれません。若い頃には言葉にできなかったことも、今なら表現できるかもしれません。

新聞の川柳に投句してみる。

句会や勉強会を覗いてみる。

一步を踏み出すのに遅すぎることはありません。

生きているあなたの言葉で書かれた川柳を、私は待っています。

峯 裕見子

選者吟

考えても考えなくても落ちる砂

青木 十九郎

おもしろいように出てくる黒い猫

重森 恒雄

まあそこへお座りという青畳

峯 裕見子

